様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３２８４

研究課題名（和文）口唇口蓋裂をもつ児の乳児期における育児支援プログラムの評価に関する縦断的研究

研究課題名（英文）Evaluation of Parenting Support Program for Infants with Cleft Lip and/or Palate: A Longitudinal Study

研究代表者
岡光　基子（Okamitsu, Motoko）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教

研究者番号：２０２８５４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：調査１は、口唇裂・口蓋裂の裂型や合併症の有無、授乳方法と母子相互作用と児の発達、母親の心理、ソーシャルサポートとの関連を縦断的に明らかにし、支援のあり方を検討することを目的とした。児の疾患特性や発達段階に応じた支援方法に関する示唆が得られた。
調査２では、口唇裂・口蓋裂をもつ幼児の行動と情緒、遊び場面における母子相互作用の特徴を明らかにし、その関連要因に関する検討を行うことで、そのような母子への乳幼児精神保健の理論に基づく介入モデルのあり方の検討を行うことを目的とし調査を実施した。口唇裂・口蓋裂をもつ児とその母親を対象とし、母子相互作用の観察および質問紙調査を実施した。

研究成果の概要（英文）：Study 1: The aim of this study was to longitudinally identify relationships of the characteristics of mother-infant interactions, infant development, maternal mental health, and social support for infants with cleft lip and/or palate, to the type of cleft, presence of complications, and feeding methods, and to thereby examine support methods. This study suggested different support methods according to clinical characteristics, and the stage of infant development.
Study 2: To identify behavioral and emotional aspects in infants with cleft lip and/or palate including the quality of mother-infant interaction in playing and also examine factors related to this relation. This study was implemented to determine the methods of intervening model based on infant mental health theory. Mother-infant dyads with infants with cleft lip and/or palate participated. Data collection was based on behavioral observations and questionnaires.

研究分野：小児看護学

キーワード：育児支援　母子相互作用　口唇裂・口蓋裂

１．研究開始当初の背景

良好な親子相互作用は、児の発達や健全な親子関係を促進することと密接な関わりがある。先行研究によると、親子相互作用の得点が低いことは、口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの後の精神発達にネガティブな影響を及ぼすこともわかっている。

育児支援の実践に役立つアセスメントツールとして、すでに日本語版 NCAFS(Nursing Child Assessment Feeding Scale)と日本語版 NCATS(Nursing Child Assessment Teaching Scale)が開発されており、今回、出生直後より育児上の困難を生じやすい口唇裂・口蓋裂をもつ児とその母親を対象とし、それらを活用し、幼児期までの縦断的な検討を行い、母子相互作用や児の発達がどのように変化していくかを明らかにしたい。

これまで本研究者は、平成 21‐22 年度科学研究費助成金（若手研究（B））「口唇口蓋裂をもつ児の乳児期における育児支援プログラム開発のための介入研究」を実施した。児の発達に伴って起こる遅れなどの問題や食事場面で困難を生じることなどについて母親の不安が強く、授乳期のみならず、離乳期も含め各時期に応じた継続的なきめ細かな支援の必要性が明らかとなった。また、口唇裂・口蓋裂をもつ児とその母親への母子相互作用の促進に向けた援助の必要性が示唆された。これら実践ﾚﾍﾞﾙにおける介入方法について示唆が得られたことをふまえ、今回はさらに口唇裂・口蓋裂をもつ乳児とその母親への臨床実践における予防的介入を遂行し、2 歳時までの縦断的な研究に発展させたい。この試みは、口唇裂・口蓋裂をもつ乳児とその母親への育児支援プログラムに関する検討を行うものである。

２．研究の目的

口唇裂・口蓋裂をもつ乳児期の子どもを母親（家族）が養育する過程において、乳幼児精神保健の理論に基づく介入モデルを用い、予防的介入を行った結果、母子相互作用がどのように変化していくのかを把握し、そのような母子への育児支援プログラムの評価に関する縦断的検討を行うことを目的とする。

・母子相互作用は、予防的介入を実施することによってどのように変化していくかを明らかにする。

・母子の属性および母子相互作用、児の発達、母親の育児ストレス、母親の精神的健康、抑うつ傾向、ソーシャルサポートとの間の関連性は、予防的介入を実施することによってどのように変化していくかを明らかにする。

・得られた効果から介入内容を見直し、具体的な介入方法について検討する。

・口唇裂・口蓋裂をもつ児の乳児期における育児支援プログラムの評価に関する縦断的検討を行う。

３．研究の方法

調査１：関東都市部の大学病院の口腔外科外来にて対象者を選定し、外来受診時に調査を行った。対象は、口唇裂・口蓋裂をもつ乳児期の母子 31 組で、研究協力への承諾が得られた者とした。研究対象に対して、月齢 2～4 か月時から 1 歳時までの期間、計 4 回の調査を行った。母子相互作用のデータについては、外来受診時に母子の食事（授乳）場面の観察を実施し、属性や児の発達、母親の育児ストレスや抑うつ、母親のソーシャルサポートなどのデータについては質問紙調査を実施した。食事（授乳）場面の観察は日本語版 NCAFS を用いて行い、外来に設置されている授乳室でライブにて行った。コーディングは、2 名 1 組でライセンスを持つ者がコーディングを行った。得られた結果は、経時的な変化とともに、裂型や合併症の有無、授乳方法の違いによる比較を行った。

調査２：口唇裂・口蓋裂をもつ幼児とその母親に対して、外来受診時に母子の遊び場面

の観察と質問紙調査を実施した。選定基準を満たした口唇裂・口蓋裂で治療後、通院中の2 歳の児とその母親を対象とした。遊び場面の観察は日本語版 NCATS を用い、受診時に外来に設置されている部屋でライブにて行い、ライセンスを持つ者がコーディングを行った。予め観察者内一致率 90%以上であることを確認したのち、実施した。調査内容は、対象の属性、健康状態、子どもの発達および行動、母親の育児ストレスと抑うつ、母親の養育体験、ソーシャルサポート、母子相互作用であった。1 回につき、所要時間は 30 分～1 時間程度であった。質問紙は直接手渡し、自宅に持ち帰ってもらい、母親の時間のあるときに記載を依頼し、郵送にて回収した。

４．研究成果

調査１：口唇裂・口蓋裂の裂型や合併症の有無、授乳方法と母子相互作用と児の発達、母親の心理、ソーシャルサポートとの関連を縦断的に明らかにし、支援のあり方を検討した。変数間の分析を行った結果、裂型や合併症の有無、授乳方法の違いにより、母子相互作用や児の発達、母親の育児ストレスや抑うつ、ソーシャルサポートの特徴が明らかとなった。児の成長発達および母親の心理・精神面における早期支援の必要性が明らかとなった。母子相互作用について、唇顎口蓋裂・唇顎裂をもつ児の母親は、生後 2～4 か月時の JNCAFS 得点の「子どもの不快な状態に対する反応」で、口蓋裂のみをもつ児の母親より、有意に低い得点を示していた（p=.01）。口唇裂の有無と母子相互作用との関連は口唇形成術前の生後 2～4 か月時の早い時期にのみ表れることを示していた。唇顎口蓋裂・唇顎裂をもつ児のうち、両側唇裂を有する児の母親は、片側唇裂をもつ児の母親よりも、生後 5～7 か月時の JNCAFS 得点の「子どもの不快な状態に対する反応」（p=.02）、「親総合得点」（p=.046）、「親随伴性得点」（p=.01）、「随伴性得点」（p=.01）で、有意に低い得点を示していた。生後 8～10 か月時の JNCAFS 得点の「Cue の明瞭性」（p=.01）と「子ども総合得点」（p=.02）で、感染症以外の慢性的な合併症をもつ児はもたない児より、有意に低い得点を示していた。児の疾患特性や発達段階に応じた支援方法に関する示唆が得られた。

調査２：口唇裂・口蓋裂をもつ 2 歳児の行動と情緒、遊び場面における母子相互作用の特徴を明らかにし、その関連要因に関する検討を行うことで、そのような母子への乳幼児精神保健の理論に基づく介入モデルのあり方の検討を行うことを目的とし調査を実施した。データ収集を終了し、現在、分析を行っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① 岡光基子，廣瀬たい子，寺本妙子，大森貴秀，大久保功子，吉増秀實．口唇裂・口蓋裂をもつ乳児の母子相互作用と児の発達、母親の心理とソーシャルサポートの関連要因　小児保健研究，2014，73(4);555-562　（査読あり）

〔学会発表〕（計　1 件）

① Motoko Okamitsu, Taiko Hirose, Taeko Teramoto, Noriko Okubo, Hidemi Yoshimasu, Yutaka Sato, Kei-ichi Morita, Ken Omura : Factors related to social support of mothers of infants with cleft lip and/or palate. International Collaboration for Community Health Nursing Research Conference 2013 March 14, Edinburgh, UK.

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡光　基子（OKAMITSU Motoko）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教
研究者番号：20285448

(2)研究分担者
廣瀬　たい子（HIROSE Taiko）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授
研究者番号：10156713

寺本　妙子（TERAMOTO Taeko）
日本橋学館大学・リベラルアーツ学部・准教授
研究者番号：20422488